

イエスの母マリア

マタイによる福音書1:16-25

①系図(アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図の最後の部分)1:16-17

1:16 ヤコブがマリアの夫ヨセフを生んだ。キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった。

1:17 それで、アブラハムからダビデまでが全部で十四代、ダビデからバビロン捕囚までが十四代、バビロン捕囚からキリストまでが十四代となる。

この系図により、イエス・キリストがアブラハムの子であり、また神が約束されてダビデの子孫であることを示している。旧約聖書には「女の子孫」であるキリストにつながる系図が書かれているが、その集大成ともいえる系図、ようやくキリストにたどり着く系図が書かれている。ここに書かれているのは、しかしアブラハムにはじまるヨセフの系図だ。ヨセフは「マリアの夫」という説明になっており、キリストの父とは書かれていない。マリアは聖霊により身ごもったのであり、ヨセフによるのではないので、この通りなのだが、「キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった」と書かれていて、キリストはマリアから生まれたことを聖書は伝えている。

17 節にある十四代は文字通りの十四代ではなく、ダビデという名前を数字で表すと14になるので、14という数字を使ったらしい。

②イエスキリスト誕生の経緯(受胎告知を含む)マタイによる福音書1:18-25、ルカによる福音書1:26-38

ヨセフに対する受胎告知(それに対するヨセフの反応も含む)マタイによる福音書1:18-25)

1:18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。

マリアはイエス・キリストの母だが、ヨセフと婚約中に聖霊によって身ごもったことが分かる。

1:19 夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしなかつたので、ひそかに離縁しようと思った。

参考)申命記22:23-24

「22:23 ある男と婚約中の処女の娘がいて、ほかの男が町で彼女を見かけて一緒に寝た場合、

22:24 あなたがたはその二人をその町の門のところ連れ出し、石を投げて殺さなければならない。その女は町の中にながら叫ばなかつたからであり、その男は隣人の妻を辱めたからである。こうして、あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

表面上は婚約中に別の男と不倫をしたことになるので、ヨセフはマリアが石打ちになって殺されることを望まなかったのであろう。内密に婚約解消を考えていた。マリアには正しい夫になる婚約者がおり、またマリアに配慮し守る人がいた。

1:20 彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。」

1:21 マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」

ヨセフがマリアに配慮し、内密に婚約解消を考えていた時に、主の使いが夢に現れた。ヨセフはマリアと結婚することを恐れていたのであろう。主の使いが「**恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。**」と言っている。ヨセフがマリアと結婚すること、妻として迎えることは神の御心であったことが分かる。そして、マリアの胎に宿っている子は聖霊によるのであり、人(ヨセフでもヨセフ以外の男)によるのではないことが告げられる。

21 節で主の使いは、マリアが生む子どもについて、説明する。①男の子である②名前はイエスとつけるように③この子の役割は、自分の民をその罪から救うこと

1:22 このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。

このような経緯が起こったことは、預言者の預言が成就するため。

1:23 「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。イザヤ7:14」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。

1:24 ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、

夢の中に御使いが現れたと言っても、誰でも信じることはできないだろう。ヨセフは神のことば(預言)に精通し、神の御心を求める人であったのであろう。眠りから覚めると、主の使いの命令通り、神の命令通り、マリアを妻として迎え入れた。

1:25 子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。

神の働きを尊重し、子どもが生まれるまで夫婦生活は控えていた。そして、御使いの言った通りに、イエスという名前をつけた。普通ではできないこと、神を畏れ敬う人でなくてはできないことをヨセフはしたことがわかる。

マリアに対する受胎告知(それにたいするマリアの反応も含む)

ルカによる福音書1:26-56

1:26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。

「その六か月目」とあるが、祭司ザカリヤの妻エリサベツが身ごもってから六か月目ということである。ザカリヤのところに来たのも御使いガブリエルであった。神からの大切な知らせがある場合、特にキリストについての神からの知らせの場合、活躍しているガブリエルが今度は、「ガリラヤのナザレという町の一人の処女」に知らせを持ってきた。

1:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアといった。

1:28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

1:29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

結婚をまじかに控えた処女といっても、当時は若くして結婚したであろうから、マリアは少女といってもいいぐらいの年齢であっただろう。そこにいきなり御使いが現れれば、戸惑って当然であろう。しかも、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と言われても、ピンとこないはず。当時は、我こそはキリストを生むのだと張り切っていた女性もいたということだが、結婚相手も決まっているマリアがいきなりこんなことを言われても、想像がつかなかったであろうと思われる。

1:30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」

1:31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。

1:32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

ガブリエルはマリアに、「恐れることはありません」と言っている、ということは、マリアが恐れていた、あるいは恐れるだろうということになる。いくら御使いから「あなたは神から恵みを受けたのです」と言われても、普通は神からの恵みとを感じるのはかなり難しいだろう。

1:34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

マリアのここでの発言は、疑いというのではないだろう。なぜなのかという理由を求めているのではなかろうか。

1:35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

ガブリエルは、マリアの疑問に的確に答えている。処女である彼女が身ごもった理由は、「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおい」、だから「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれ」るのだということを知らせた。

1:36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。

1:37 神にとって不可能なことは何もあります。」

神の全能の力の説明のため、ガブリエルはマリアの親類のエリサベツを例に出している。不妊の女である、しかも子どもを産む年をはるかに超えた女性が男の子を宿して、妊娠六か月だ。「神にとって不可能なことは何もあります」。だから、マリアがキリストを聖霊によって身ごもっても、何の不思議もないのだということを伝えている。

1:38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

いくら御使いの言葉と言っても、自分の立場(婚約中)を考えれば、パスしたくなるのではないか。そこを、「私は主のはしためです」と言えるだろうか？何が起こっても私は神がなさることなら、受け入れます、と言えるだろうか。神に対する、みことばにたいする絶大なる信頼、信仰がなければ、この言葉は出なかったのではないか。「あなたのおことばどおり」とは、神への完全な従順の態度が表れている。

エリサベツのもとへ(聖霊の導きによる母体保護) ルカによる福音書1:39-1:56

1:39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。

1:40 そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。

ガブリエルから親戚のエリサベツが妊娠したことを聞いたマリアは、自分の身に起こったことの相談相手として適任だと考えたのではなかろうか。自分が妊娠したりすれば、大変なことになることも想像できたし、一時の安らぎ、考えをまとめ、落ち着く時間が必要だっただろうと考えられる。

1:41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。

1:42 そして大声で叫んだ。「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。

1:44 あなたのあいさつの声が私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました。

1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

エリサベツはマリアの身に起こったことを、マリアの挨拶をきっかけとして、自分の胎の子を通して理解したようだ。そして、エリサベツは聖霊に満たされ、預言を始める。そして、マリアに励ましの預言の言葉をかけた。「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

マリアの賛歌ルカによる福音書1:46－1:56

1:46 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、

1:47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。

マリアは「たましい」と「霊」で主をほめたたえている。全身全霊で主をほめたたえている。

1:48 この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。

マリアは自分のことを「卑しいはしため」と呼んでいる。神の前にある自分の姿をよく知り、謙遜な女性であることが分かる。「私を幸いな者と呼ぶでしょう」とエリサベツの語った預言も受け入れている。

1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、

1:50 主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。

1:51 主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。

1:52 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。

1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。

1:54 主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。

1:55 私たちの父祖たちに語られたとおりに、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

マリアはイスラエルの歴史、みことば、預言に精通していたのであろう。彼女自身が、預言の言葉を語っている。マリアの賛歌は、旧約の預言者サムエルの母ハンナの言葉の影響があるとされている箇所だ。マリアは神に絶大なる信頼を置いている、そして神の恵みと憐れみにも。そして、神が復讐してくださる方であることも信じている。なので、これからの辛い生活を生き通すことができたのであろう。

1:56 マリアは、三か月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。

結果的にマリアは安定期に入るまで、親戚のエリサベツのところに身を寄せて、その間は人々の非難から守られることとなったようだ。

③イエスキリストの誕生と人々の反応ルカによる福音書2章

誕生の様子ルカによる福音書2:1－2:7

2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。

2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。

2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。

「全世界の住民登録」って、世界にローマ帝国しかないような口ぶりの皇帝アウグストゥ。「キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった」ってことは、何度か住民登録が行われたってことですよ。しかも、キリニウスという一人の人がシリアの総督であった時だからかなり限られた期間内であったにも関わらず。しかも、「人々はみな」ってことであり、しかも自分の町に帰らなければならなかった。病人や

老人、女子供もいただろうに。代理を立てることもできなかったのだから。大変なこと。

2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

神はこのようなローマの一皇帝の名誉欲を利用して、キリストの預言を成就させようとしていた。ダビデ家の血筋であったヨセフ(ユダ族であった)は、ダビデの生まれ故郷のベツレヘムに行かなければならなかった。しかも臨月近いいいなずけの妻マリアとともに登録するために。マリアはまだかなり若く、いいなずけ状態でヨセフが引き取り妻になったため、結婚生活もほとんどしていない、しかも初めての妊娠。親戚のエリサベツのところでいろいろ話は出たかもしれないが、そのエリサベツが近くにいるわけではない。相当不安だったのではないか。臨月で体も重くなっている、胎児が動くのでよく眠れなかったかもしれないし、相談相手もヨセフ以外はいない。孤独で淋しかったであろう。

そうこうするうちに、旅の途中で、きちんとした宿泊施設も、赤ちゃんを取り上げる産婆もいない状況で、マリアは男子の初子を産んだ。赤ちゃんを置く場所もないので、飼葉おけに寝かせるしかなかった。洋服も準備する時間がなかったのも、こどもを布にくるんだ。(そのような洞窟は、万が一、死人を葬るための布が置かれたりしているとされる。ですから、イエスの埋葬も示唆するような設定。)初めての妊娠・出産がこのような異常事態下になってしまったマリア。女性なら辛かったと思う。いくら天使に聞かされていても、現実は大変だったと思う。

キリストの誕生を神から知らされた羊飼ルカによる福音書2:8-2:20

2:8 さて、その地方で、羊飼たちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。

2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

2:14 「高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

マリアが男の子を生んだその一方で、御使いは忙しく動いていた。羊飼いに救い主キリストが生まれたことを伝えに行った。そのしるしとして、「**あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。**」と御使いは羊飼いたちに伝えた。もう羊飼いがキリストに会いに行くことを知っているかの如く話している。そして、その御使いだけでなく天の群生も現れて、キリストの誕生を賛美した。地の上で平和があることが、祈られているが、御心にかなう人々のためにあるようにとの賛美だ。

2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

一連の出来事が終わった時、羊飼いたちは、ベツレヘムまで行って、主が知らせてくださったことを見に行くことにした。

2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

2:17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

2:18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。

2:19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

羊飼いたちは、もたもたしてはいなかった、「急いで行って」というところに羊飼いたちの従順さが表れている。そして、天使が言っていたように、「**飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた**」。

「**聞いた人たちはみな**」と書かれているので、羊飼いが天使から聞いた話を聞いた人はヨセフとマリアだけではなかったと思われる。聞いた人々は、聞いた内容に驚いただけだったが、母マリアは、「**これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。**」自分も羊飼いと同じく、御使いからの言葉を聞く体験をしているので、おもうところあったに違いない。

2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

羊飼いたちも最初は、半信半疑だったのだろうが、「**見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだった**」ため、救い主の誕生を知り、「**神をあがめ、賛美しながら帰って行った。**」神からの言葉を聞き、それを実行し、救い主に出会い、信じることができた。羊飼いは、みこころにかなう人になることができ、平安をいただいて帰ることができた。

エルサレムでの出来事(キリストを待望していた人の反応) ルカによる福音書2:21-

その①シメオンルカによる福音書2:21-2:35

2:21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

ヨセフもマリアも御使いから聞いた神の命令に従い名前をつけたことが分かるし、律法の定めに従い割礼がなされたことも分かる。

2:22 そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。

2:23 それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。

2:24 また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。

さらに、モーセの律法に従い、初子を主に捧げるため、エルサレムまで赴いた。「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」というのは、貧しい人用の捧げ物であったので、ヨセフ一家が貧しかったことが分かる。

2:25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。

2:26 そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。

2:27 シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。

2:28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。

2:29 「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。

2:30 私の目があなたの御救いを見たからです。

2:31 あなたが万民の前に備えられた救いを。

2:32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

聖霊が望んでおられる正しい敬虔なシメオンという人が、聖霊に導かれてイエスに出会った。

2:33 父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。

ヨセフとマリアはシメオンが語った幼子についての預言に驚いた。

2:34 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れたり立ち上がったるために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。

2:35 あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人々の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

シメオンは、母マリアに向かって具体的な幼子と彼女自身について、将来どうなるかの預言をしている。

その②アンナルカによる福音書2:36－2:39

2:36 また、アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、

2:37 やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。

2:38 ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。

この幼子が、イスラエルの贖い主、救い主になることの預言をした人がもう一人いた。「アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者」だ。そして、「エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。」とあるので、イエスがどのような人物か、キリストを待ち望む人には知らされた。

2:39 両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰って行った。

「両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げた」とあるので、ヨセフとマリヤは神の掟をしっかりと守る人であった、そのような両親のもとにイエスが生まれ、育てられたことが分かる。

その③当方の博士、ヘロデ王、宗教指導者、民

マタイによる福音書 2 章2:1－2:18

2:1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。

2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」

ユダヤ人がローマ帝国の圧政下にあった時、ユダヤ人ではない異邦人の東方の博士たちがエルサレムに現れた。ヘロデ王はユダヤ教に改宗したようだが、それでも生粋のユダヤ人ではない。異邦人の遠くから来た賢者たちが、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」を捜し求め、「礼拝するために来ました。」礼拝するために来ました。と言うのだ。そして、旧約聖書の預言を知っているかのように、「その方の星が昇るのを見た」からだという理由も訴えている。参考)「民数記24:15－17 24:15 そして彼の詩のことばを口にして言った。「ベオルの子バラムの告げたことば。目の開かれた者の告げたことば。

24:16 神の御告げを聞く者、いと高き方の知識を知る者、全能者の幻を見る者、ひれ伏し、目の開かれた者の告げたことば。

24:17 私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち砕く。」この預言を語ったバラム

も、ユダヤ人ではなく、しかもモアブ人の占い師だというのも皮肉なことだ。

2:3 これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方を拝みに来た」と聞いて、王であったヘロデが動揺したというのは、もっともだが、「エルサレム中の人々も王と同じであった。」というのは、いったい何事なのであろうか。キリストが生まれると聞いて、喜ばないとは。

2:4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。

2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。

2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』

動揺したヘロデ王は、「民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。」のだが、この話を聞いたユダヤ人、しかも祭司長や律法学者たちも、自分たちの知識の披露はしても、キリスト誕生を喜ぶ言葉は全くない。マリアはユダヤ人の人々から望まれていない子どもを産むことになったのだ。

2:7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。

2:8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。

表面上はヘロデは博士たちに対し、博士たちの探しているユダヤ人の王に関心を持ち、敬虔を装うが、実は暗殺計画を練っていたのだ。マリアは、時の指導者から暗殺される危険のある子ども、そして民や宗教指導者たちさえ歓迎していない子どもを産むことになった。

2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。

2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

2:12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

一方、異邦人の博士たちは、星の導き(主の導き)で、探していた幼子のところまでたどり着くことができ、喜び、ひれ伏し、礼拝し、贈り物を捧げた。贈り物も、宝の箱に入った黄金、乳香、没薬だ。孫序そこらの普通のプレゼントではない。おそらく博士たちは神に示され、幼子の将来を暗示する品々を用意し、大切に運んできたのであろう。いずれにしても、幼子を生んだマリアは訪問者を受け入れて、考えるところがあったに違いない。神の計らいで、ヘロデに騙されることなく、博士たちはヘロデのところへ

戻ることなく、別の道から自分の国に帰っていき、幼子は守られた。

2:13 彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」

2:14 そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、

2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであった。

博士たちが自分の頼みを聞かなかったことに気づいたヘロデ王が刺客を差し向けようとしていることを神はご存知で、主の使いが夢でヨセフにエジプトへ逃げるように命じた。神からの警告を聞いたヨセフはすぐさま従い、その夜のうちに言われた通り、幼子とその母を連れてエジプトに逃れた。

子どもが生まれて、ようやくそのことを祝福してくれる訪問者が現れ、プレゼントまでもらったと思ったら、逃避行。マリアは子育ての最初の段階からかなり苦勞をしている。もちろん、ヨセフもそれにしっかり付き合っている。幼子イエスを殺そうとしているヘロデが死ぬまで、外国の地エジプトにこの家族は滞在することとなる。

2:16 ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。

ヘロデが博士たちが自分の命令通りにしてくれなかったことを気づくのに少しは時間がかかったのかもしれないが、エルサレムとベツレヘムでは、そんなに距離があったわけではない。「二歳以下の男の子をみな殺させた」とは、確実に博士が探していたユダヤ人の王とされている幼子を殺そうという意図がありありだ。

2:17 そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。

2:18 「ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」

ヘロデの魔の手はベツレヘムとその周辺一帯に及んだ。「博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。」と書かれている。ヨセフ一家がどこにいたのかはっきりしない。博士たちは、エルサレムに来て、ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこかと聞き、王のシンクタンクのような祭司長律法学者たちからベツレヘムと知らされ、その方向に向かったのであろうが、星に導かれて動いているので、もしかするとベツレヘムの方まで行ったのかもしれない。いずれにしても、ヨセフたちが住民登録のためにベツレヘムに行って、そこでイエスが生まれたことで、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子は皆殺しにあってしまう。

④イエスの成長期の話

その①マタイによる福音書2:19-2:23

2:19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにいるヨセフに現れて言った。

2:20 「立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。」

2:21 そこで、ヨセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。

「幼子」と書かれているので、ヨセフ一家のエジプト滞在はそう長くはなかったようだ。マリアのことが繰り返し、幼子の母と呼ばれている。ヨセフは主の使いの命令に従い、幼子とその母をしっかり守っている。エジプトという外国から帰国したし、主の使いからイスラエルの地に行きなさいと言われた。もしかしたら、再びヨセフの父祖の地、ベツレヘムに戻ろうとしていたのかもしれない。

2:22 しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた。

しかし、ヘロデの息子のアルケラオも父に負けず劣らずの悪人だったようだ。まずもって、ヨセフはアルケラオが統治する場所を恐れている。さらに、夢で神から行かないように警告を受けて、ガリラヤ地方に行っている。

2:23 そして、ナザレという町に行き住んだ。これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。

そして、ガリラヤ地方でも、ナザレという町に住むことになる。結果的に預言が成就するために。

イエスの成長期の話その②マタイによる福音書2:40-2:52

2:40 幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがその上にあった。

2:41 さて、イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた。

ここでも、過越の祭りを毎年エルサレムで守っていることがわかるので、イエスの両親が信仰深かったことが分かる。

2:42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った。

2:43 そして祭りの期間を過ぎてから帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかずに、

2:44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを進んだ。後になって親族や知人の中を捜し回ったが、

2:45 見つからなかったため、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。

2:46 そして三日後になって、イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

2:47 聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

2:48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです。」

マリアの最初の反応は普通のお母さんの反応だ。

2:49 すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

2:50 しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。

2:51 それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

ヨセフもマリアも息子イエスの言葉は理解できなかった。しかし、母マリアは、「これらのことをみな、心に留めておいた。」と書かれており、後でそれを思い出すことになる。

2:52 イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。